

海防の細末

り夏二編  
春陽堂

20

15

10

5



雨後地のほえき









5

10

15

20



平路地の細道



喜陽  
堂板







竹久夢二編

繪入  
情歌  
**露地**  
のはそみち

春陽堂發行



舌代

それは何時の世から歌はれたものや  
ら、またどんなやさしい戀人の吐息で  
あつたやら、私は知らない。再び夢み  
ることが出来ないから、遠い昔に滅び  
たものだから懐しいのであらうか。  
かにかくに、曾て戀する人達が歌つた



戀の唄である。街の巷に、野の路に、ま  
た堀どめの屋方船の中に、これ等無名  
の樂人が、唄によせた嬉しい哀しい心  
意氣は、今も猶私達の心にほのかな微  
風をおくるであらう。

千九百十九年未正月 編者誌す

露地のほそみち



飛騨右地の細道

飛騨右地の細道



逢ふ瀬

せかれてあればくよくくと  
たまさか逢へばそわくと  
言ひたい事も何ぢややら  
よう顔見せて下さんせ。



恨み

落ちた涙を小指でそめて  
ふたり忍んだ櫺子の窓に  
命と書いたはうそかいな。

宵々

「何が可笑うて  
そなたは笑ふ」  
「なんの  
嬉しいことばかり」



添まひ  
寝ね

そつとお寄りな  
露つゆけき袖そでは  
もしやこほれて  
消きえようもの。

帯おび

えま待まちたしやんせ  
いま帯おび解といて  
ゆくわいなあ。  
さんざ泣なかせておいたもの。



初夏

桃も櫻もはや散りそめて  
夏の寒るのは間もないに  
織つて着せよもの緋の單衣  
向ふ通るは忠さぢやないか  
物を思へば織違へ

逢曳

木の下闇の手枕に  
一年振りの中直り  
身はまかせても物言はぬ  
もたれかゝればなよ竹の  
節をこめたる愛思ひ  
心が問はゞなんとせう。



壬生狂言

様は陽炎うつろひやすやな

我は薄雪うられても

逢へば心がきえぐとや。

何故にお前はそのやうに

壬生狂言の役者かも

つい物言ふて下しやんせなあ。

明の鐘

宵はまち、そして恨みて曉の

別れの鳥とみな人の

憎まれ口なあれ鳴くわいな

聞かせともなき耳に手を

鐘は上野か浅草か。



戀こひ  
文ぶみ

月の夜櫻袖の露つきのよざくらそでつゆ

濡れしえにしの一重帯ぬれしえにしのひとへおび

土筆の筆に文かきそむるつくしのふでぶみにぶみかきそむる

戀といふ字がこひといふじが

わしや羞かしい。わしやはづかしい。

海うみ  
邊べ

越えてやれこりや松原越えてこえてやれこりやまつはらこえて

鳴海絞がちらくくとなるみしぼりがちらくくと

白い渚がお十七かしろいなぎさがお十七か

袂が亂れてちらくくとたもとがみだれてちらくくと





ゆかりの月つき

憂うれしと見みし流ながれの昔むかしなつかしや

可愛かあい男をとこに逢あい坂さかの

關せきより辛つらい世よの習ならひ

思おもはぬ人ひとに堰せきとめられて

今いまは野の澤さはのひとつ水みづ





すまぬ心のなかにもしばし

澄むはゆかりの月の影

忍びてうつす窓のうち

せまう楽しむ誠と實

こんな縁が唐にもあろか

花咲く里の春ならば

雨もかほりて名やたよむ。



柴垣

向ふ通るは忠さぢやないか

近うお寄りな垣のそば

今日も今日とて母さんの

お嫁にゆけと言はしやんす

お前とならば片山里の

どんな貧しい暮しでも

わしや嬉しいと思ふもの。

越すに越されぬ柴の垣

あれさ小袖が濡れよぞえ。



七たな

夕た

去年こゝろの初秋はつあき七夕たなばたの

坐敷ざしき踊おどりにかこつけて

年ねんに一度いちどのことなれば

鬼灯ほらぼんとつてもだんないか。

都みやこ

鳥とり

申し船頭せんとうさんえ

都鳥みやこどりの羽根はねぬいてたもれ

おはぐる筆ふでにするほどに。



おしろい花はな

風かぜのたよりにほのかに聞きけば

細ほそいたつきも三筋さんすぢの紋いぼの

唄うたの師匠ししやうをしてゐるさうな。

窓まどの小鉢こはちのお白しろい紛まな花はなも

ゆふべくは寂さびしかる。

手紙てがみ

とても名なの立たたば

宵よよからおりやれのう

他よそへ忍しのびの

歸かへるさはいや。





忍ぶとも

しのぶとも

よそへはしらゆな

添はぬは浮世

名こそ惜しけれ。



占うらな

ひ

否いやか諾うやうかは不知しらぬ火ひの

心こころづくしの神かみさま様さまも

鶯うすを誠まことにかへさんす。

ほんに嘘うそかえ

おゝ嬉うれし。





思おもひ 寝ね

思寝おもひねはそつとせうもの  
殿とのがそろと御座ござるもの  
殿とのがそろと御座ござらば  
障子しょうじそろりと立たてようもの。

待まち つ 夜よ

萩はぎと萩はぎとは  
どれが露つゆやら涙なみだやら  
どうやらかふやら  
わきて待まちつ夜よの袖そでは  
どれが露つゆやら涙なみだやら。



浮世

戀しゆかしきとりぐを  
何から先きへおゝ辛氣  
文だに身にはまゝならぬ  
まして浮世の。

行燈

娘何する行燈の影で  
可愛い殿御の帶くける  
帯はいそがぬ羽織がいそぐ  
いそぐ羽織の紐がない。  
なんとせうぞの。



小袖

小袖流さばとても流さば  
戀といふ字をたつた一筆

りしと

書いて流しやれ。

妻

朝野にいでも若菜をつめば  
露に小袂がみな濡れた。  
小袂ぬれても濡れてもまよ  
妻と定まりや濡れもせう。





膝ひざ  
枕まくら

逢あひたさに

飛とんで來きて見みりや轉ま寝ねの

まあこの顔かほのやつれ様さま

みんな私わたしの心柄こころがら

そつとしてだす膝枕ひざまくら





小鳥

日暮ひぐれの小鳥こどりはこそくと

小藪こやぶの中なかへこそくと

おいらは娘むすめのふところへ

そろくとはやそろくと。



思おもはぬ戀こひ

花生はなけの

水みづにだまされ

咲さいたが口くち惜やし

根ねもない私わたしに。

うつゝな

鐘かねはきこえて憂うれきことの

うすく更ふけゆく秋あきの夜よの

人ひと待まちつ人の物もの思おもひ

現うつなのうつゝなよ。



出船

三十二反の  
帆をまきあけて  
かへすがへすの暇乞ひ。  
おや捲いたり  
ぎりんこしよ。

暮鐘

暮の七つに  
なる鐘は  
誰が撞くやら  
しんぞしみぐ身にしみる。



さゝ結び

わが戀は

庭の下のさゝ結び

さゝ結び

誰とりあけてさとりばや。

薄情

思やこそくれ

思はでこよか

千夜萬夜は寢てこそよけれ。

かけてよいのは衣桁に小袖

かけてたもるな薄情



木津川

折柄月の出湖や

流るゝ方は

木津川へ

こぎ紅に

染めこみし

紅葉故郷へ錦せむ

散りゆく末は

はらくと

降るは涙か秋雨か

しかとはならぬ

川堤



淀川

思ふこと

言はでやつひに山城の

淀のわたりの浮瀬にも

沈みてはてぬ行衛こそ

なみくくならぬ思かな。

逢はぬ夜

いかに隔てし

覺束なさぞ

解かで寝る夜の

明くる間は

まあこの帯の長さはも。



虫むしのせらせ

「この帯おびの詰じばるゝは

「はてさて様さまのお出いでぞや」

「なんのまあ晴はれがましや

わしの心こころの結むすほるゝに」

切きれた縁えん

寺てらの鐘かねなら

引ひけば鳴なろ。

おいてもくんねえ

切きれ縁えんだに

引ひけばとて。



門かど

誰たれぞやこの夜更よふけに  
さいたる門かどを叩たたくは  
叩たたくともよも明あけじ  
宵よの約束やくそくなりければ。

妻つま  
琴こと

ひく人ひとはそれく  
幾多あまたあれど  
妻琴つまことの  
もとの心こころかはらずば  
琴柱ことぢにおちよ秋風あきかぜ。





夕千鳥

夕千鳥

招けども

磯へ寄らばこそ

思切れとの風が吹く。



思おもひ

出で

伽羅きゃらの香かと

この君きみ様さまは

幾いく夜よとめても

とめあかぬ。

ほんにえ。





薄雪

おもかけは

手にもたまらず

また消えて

そはぬ情の

薄雪。

蕾

柴垣越しに

雪の振袖ちらと見た。

振袖の雪の

ゆいよ蕾の

振袖ちらと見た。



通かよひ路ち

吉原よしはらつなぎの浴衣ゆかたがけ

可愛かわいけりやこそ

神田かんだから通かよふ

憎にくくて神田かんだから通かよふものか。

佐さ田た岬みさき

様さまが船ふねかよ佐田岬さださきまわる

千鳥ちどりかくれの帆ほが見みえる。

かくれの千鳥ちどりの

帆ほが見みえる。



あけむつ

逢ふたその夜の

明六つ鐘を

待つに代へたや

暮六つに。

鈴

蟲

憎くや鈴蟲の

鳴くべき野では鳴きもせで

君と我との間をば

きれんやきれあんれきれきれ

ちんからころろと鳴く憎くさ。





ふたり寝

身は習はしの假寝にも

逢ひなれし身の癖わろく

ひとり寝られぬ露の床

こちよれ枕

引きよせて投げそ





投げそ枕に罪もなや

いざとて一人より添へど

女岡志の仇臥しや

我は深紅の

ようや、よやよ

結ほれ糸の

とけぬ心が辛ろござる。



加賀ぶし

あだしこの身を煙となさば  
とても浅茅の里近く  
小夜の衣に香はとどまりて  
せめて見ぬ世の形見とも。

墨 染

山鳥

誰を恨みて墨染に  
浅き契にあひ馴れそめて  
なかく今はなかくに。



島が島なら

島が島なら

世が世であれば

なんの地方に身は持とぞ

よいこのいかに

なんの地方に身は持とぞ。

つゝじ

さても見事な

みたらい躑躅

晩につほみて夜中に開く

夜明がたにはちりちりと。



木で  
偶く

みめがよいとて

心が人か

京都木偶の坊で

面ばかり。

江え  
戸こ

江戸へ江戸へと

草木もなびく

江戸にや

花さく實もなりて。





露つゆ

あさまよりの小鳥こんがらすが

露つゆにしよほろ濡ぬれたような

ゆりくくと苗なへをとる

露つゆに濡ぬれたよな。



旅たづ

ゆきくれて旅たづの道みち

うらぞ寂さびしき波なみの音ね

かへらうと鹿しかの鳴なく聲こゑに

夜よもすがら泣なきあかす。





茄子

生れなれ茄子

背戸家の茄子

生らねは嫁の

これ嫁の名の立つに

これの。

戀慕

君は五月雨思はせぶりや

いとど焦るゝ身は浮舟の

浪に揺られて島磯千鳥

れんれれつれ。



平戸の瀬戸

平戸小瀬戸から

船が三艘見ゆる

丸にやの字の

帆が見ゆる。

島原

九十九島の中ゆく舟は

様の船かよ

なつかしや。

見えつ隠れつ

なつかしや。



沖の鷗

橋の欄干に腰をかけ

沖を遙かに眺むれば

沖の鷗が三つ連れて

また三つ連れて睦ましく

揺られながらも、君戀し。

岩田帯

千代くれなるの

おき綿に

君が黄金の

ゆひかねならで

笹に結ぶが



文ふみより嬉うれし

裾野すそのの梅うめの

うつり香かに

在所ざいしよすめ娘むすめとなんのまあ

尾上おのうえの松まつも床ゆかのうち

眼めにて結むすびし岩田いはた帯おび

やつれ

谷たにの小川をがはに

影かげうけて

このやうに

身みがやつれたかや

えゝしよんがえ。



閨の文

夜や寒き衣や薄き獨寢の

夢も破れてうつとりと

硯ひきよせする墨の

音さへしのぶ閨の文

一筆そめて顔あけて

昨日は恨み今日はまた。

朝の雪

しづかにわたる鐘の聲

昨夜の夢の今朝さめて

寢亂髪のやるせなく

積ると知らでつもる淡雪。



浮名

露は薄と寝たといふ

薄は露と寝ぬといふ。

いや寝たといふ寝ぬといふ。

寝たらこそ

薄は穂に出てあらはれた。

七草

秋の野に出て

七草見れば

露で小袂はみな濡れる。

よしてもくんねえ

鬼あざみ。



よそ心こころ

思おもひの増ますは

誰たれ故ゆゑかや

折をりくに他よそ心こころある振ふ見みれば

添そ寢ねしながら心こころもとなや。

時とき  
鳥とり

身みはひとつ

心こころは二ふたつ三みつ侯たうの

流ながれまじむうたかたの

解とけて結ゆぶの假かり枕まくら

曉あけ方つぎの雲がの帯おび

鳴なくか中ち洲かの時とき鳥とり





無理な酒

忍ぶ戀路はさて果敢なさよ

今宵忍ぶが命がけ

涙でよごす白粉の

その顔かくす無理な酒。





文ふみ  
使つかひ

文ふみがやりたや

新町筋しんまちすぢへ

とりちがへて仇あだにはやるな

花はなのふき様の

手てに渡わたせ。



夜

いよえ／＼うち解けて

ゆらくとお寝れ

なうさ、まだ夜は夜中。

さあいよえ。

獨

寝

獨寝はいやよ

曉の別ありとも。

獨寝もよやの

曉の別おもへば。



柳屋の娘

京では三條

柳屋の娘

よつわり帯を褌にかけて

いかにも腰が

しやなくと。

折鶴

そんなこと

存じませぬと

小膝のうへで

鶴を折る。



立つ鳥

蘆の葉を

そよがせて

立つや小鳥の

小鳥でさへも

ひとりでは寂しかるもの。

五月

五月五月雨

涙の雨の降るにつけても猶床し

ひとり寢交す枕手枕

降るにつけても猶床し



捨小舟

眞垣まがきながらの御見ごけんは辛つららや  
人目ひとめ忍しのべばおもはくばかり  
袖そでは涙なみだの淵瀬ふちせとなりて  
夏なつは流ながれの身みは捨小舟すてこぶね  
せめてしばしは泊とどれかし。

戀衣

逢あふは別わかれとかねては知しれど  
今朝けさの後朝ごあすいつよりつらや  
袖そでは血汐ちしほの涙なみだとなりて  
恨うらみ焦こがるゝ身みは戀衣こひころも  
せめて一夜いちやは來きても見みよ。



亂れ髪みだりかみ

後の朝のちあしたに通かよはす文ふみの

昨夜よべの手枕たまくら

今朝けさはなかく、今朝けさはなかく

寝亂髪ねみだりかみを結ゆふ甲斐かひも。

紅くれない

紅くれないの薄うすくなるとも

そもじとわれとは

一期いちご契ちぎるべいぞ

よもさ小枝こえだに白髪しらかみの

咲さくと契ちぎるべいぞよもさ。



笠かさの緒お

とろりくと

しむるめの

笠かさのうちよりしむりや

腰こしが細ほそくなり候きこうよ。

蠻くつわ

蟲むし

虫むしの音ねを値ね切る不ぶ粹すいも時とき世よなれ

虫むしも啼なかずば賣うられじを

因果いんぐわと啼なくよくつわ虫むし。



雨あめの夜よ

雨あめの降ふる夜よはござんせと  
約束やくそくしたに、晴はれくさる  
天道てんどう様の情じやう知ちらす。

かたみ

腰こしにさけたる巾着きんちやくは  
これも愛あいき人のひと  
縫ぬひじやほどに。





雪ゆき

雪をまるめて

お玉たまとつけて

抱だいて寝ねたらば

これわいさの

みな解とけた。





千草の里

名にしあふ富士と筑波の山合に

露の情の一夜妻

色もほのめく千草の里へ

人目の關をしのびつゝ

木の間がくれに逢ふ夜さは

水に隅田の月もいや。



手紙

おなじこと

二度書かせたわいの夕暮の

辛氣鳥がおつになき

呼ばれもせぬにうけ答へ

エ、果敢ない戀の

邪魔しやんな。

相縁

富士や淺間の煙はおろか

衛士のたく火は澤邊の螢

焼くやもしほで身をこがす

そうじやいな相縁氣縁はあじなもの

片時忘るゝひまもなく

いつせつ身體もやる氣になつたわいな

エ、おかたじけ。



奇黄丸

卯月八日は奇黄丸

それはお前何のこつたへ

いきもとんまも虫のせい

むかひのかゝる長箱の

ぺん／＼草にもやるせがねへ。

朝

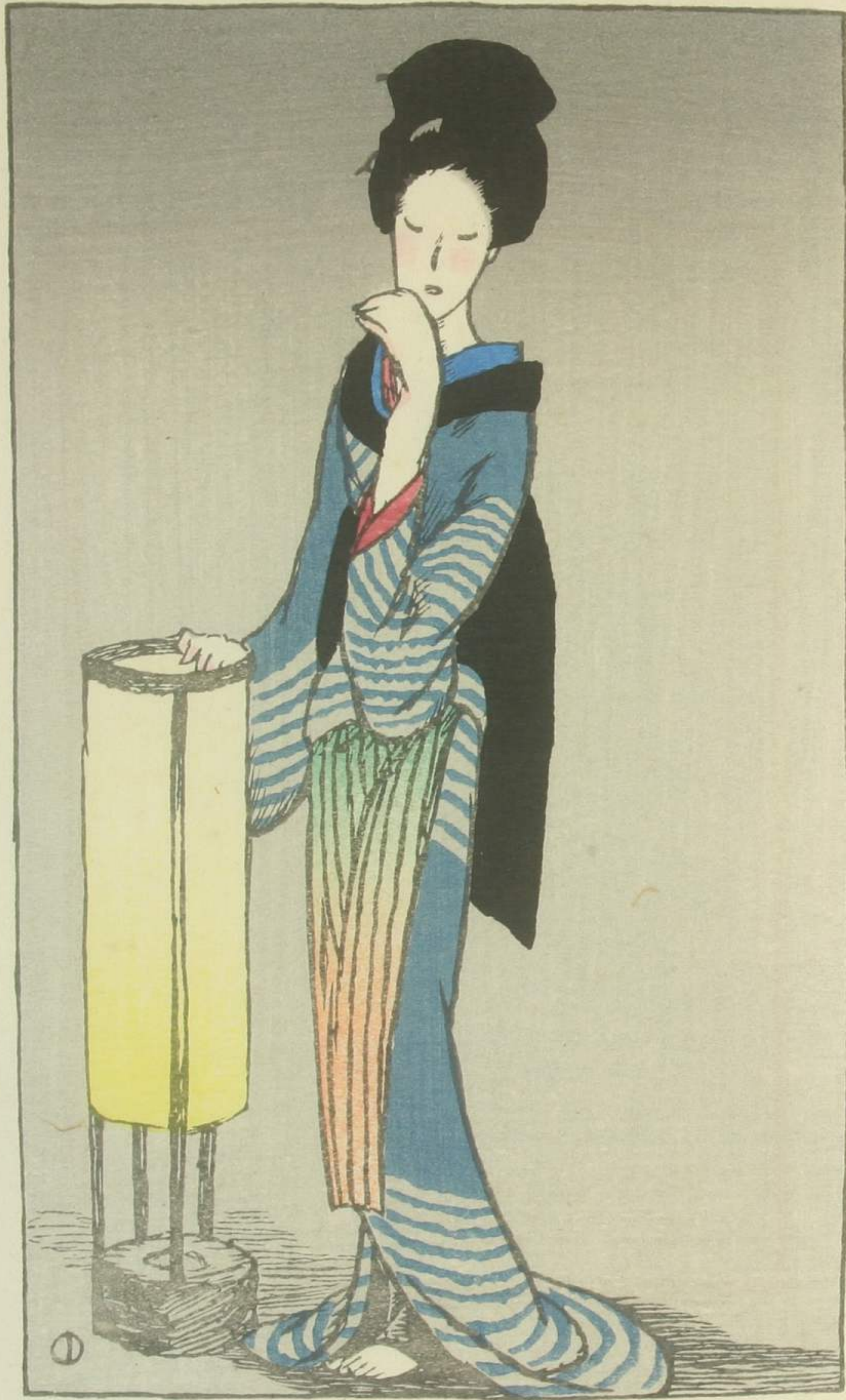
夏の夜の夏の名残りの

残んの月を窓に見て

あれいぢらしやくより枕と塗枕

並んでゐるを見やしやんせ。





別れ煙草

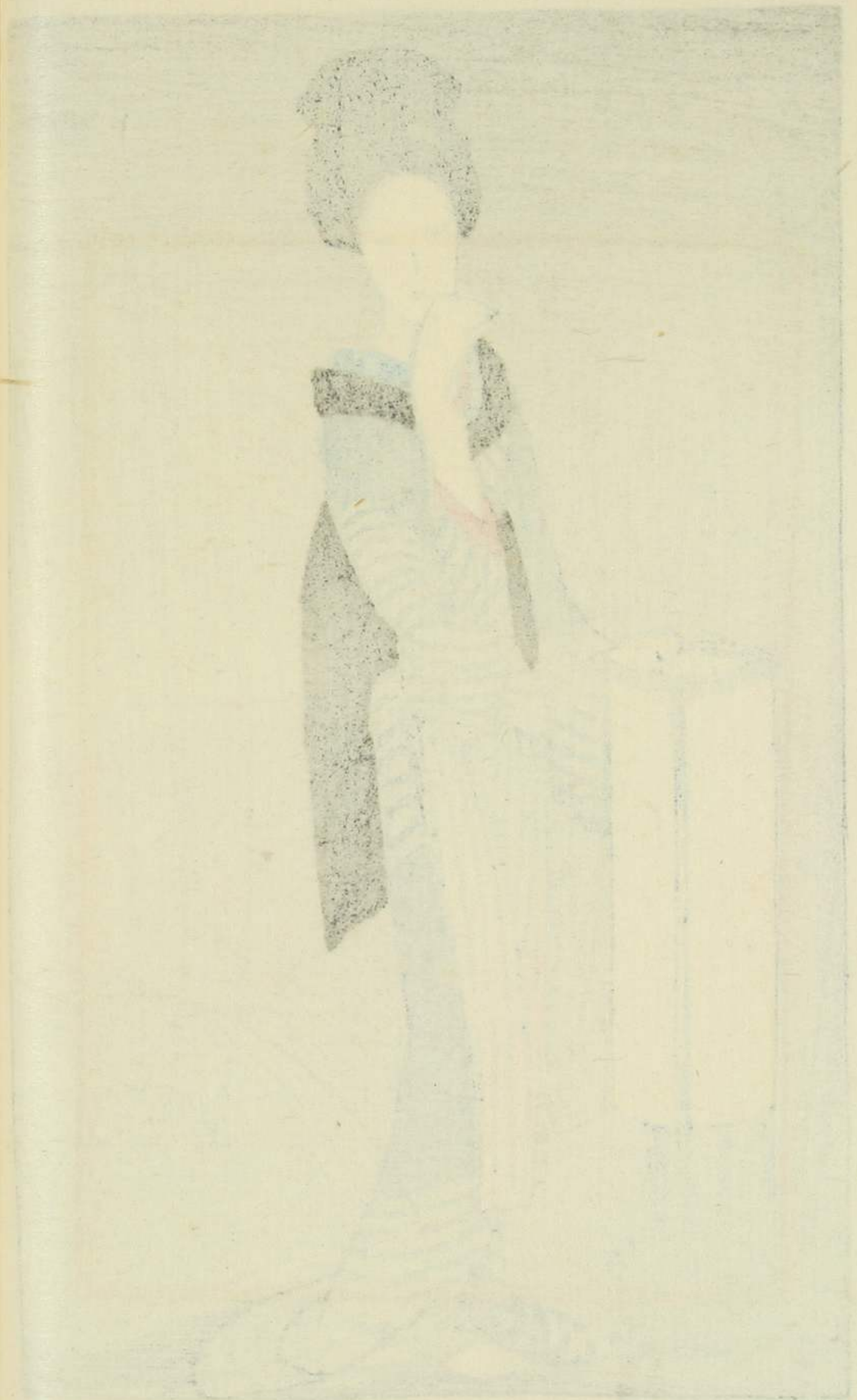
わかれ煙草の

思ひのけむり

思ふかたへと

なびくもの。





浅茅の里

あだしこの身を煙となさば

とても浅茅の里近く

小夜の衣に香はとどまりて

せめて見ぬ世の形見とも。



長恨歌

静けき殿の窓のうち

あやなく花のかほりきて

恨は長き春の夜に

捲きもえやらぬ珠簾

金堀り

節季候に身はやつしても

縁さへあらば、また逢をと

言ふて別れてはや三年。

佐渡の金山遠ければ

金が出たやら、死んだやら。



悪

縁

かねてより

悪性者あくせうものと知りつゝも

虫むしが好くすやら忘わすられず

薄情はくじやうさへも場違ばちがひへの

親切しんせつよりも身みに染しみて

今は眞實しんじつ身みもたまも

投なげた朱羅宇しゆらうの辻占つじうらに

命いのちと出でたも無理むりかいな。



角兵衛獅子

越後の國の角兵衛獅子は  
越後出る時や涙で出たが  
今ちや越後の風もいや  
親が太鼓打ちや子が踊る

踊れよ踊れ

踊りや黄金の雨も降る。  
つるべ返しの日も暮れて  
野末に一つ灯がともる。  
とても今宵は野洲泊り。



かあいよし松

向ふからくる小提灯

伊吾よくと呼んでも見たが

かあいよし松誰とねる

サ、おとつさんと

寝たらよしく。

おもひ川

辻君のたへぬ流れの思川

戀には細る柳影

しばしとめたき三日月の

櫛のむねさへさよ風に





さはりと解<sup>と</sup>けし洗<sup>あ</sup>髪<sup>ひが</sup>  
むすんできよき水<sup>みづ</sup>の音<sup>ね</sup>。





相惚れ

あんなひと

どこが好うて惚れたかと

人の噂も七十五日

いまは誓紙のかすくを

する墨よりも身が細る。

ほんに可愛い人ぢやえ。



流し文なが  
文がみ

吉野川には櫻をながす

龍田川には紅葉をながす

橋の上より文取りおとし

水に二人の名を流す。

高臺寺かう  
臺だい  
寺じ

しんほエ高臺寺はなんで氣がそれた

盆の踊にお糸を見染め

それからふかふなれ馴染み

壇家廻りもおろそかに本尊様も酒にしてみましたエ。



池の鯉

おほろにうつる由縁の影は

濃紫の藤浪の

はなれまいてふしがらみも

身は氣づまりな池の鯉

アレお手がなる忙しない

まだ咄残りがあるわいな。

十日ゑびす

十日ゑびすの賣物は

はせぶくろにとりはち錢がます

小判かけ金ばこたてゑほし

ゆでばすさいづちたばねのし

おさゝをかついで千鳥足。



星月夜ほしづきよ

箱根山をばくらしと通りはこねやま

花の小田原星月夜はなをだはらほしづきよ

しよんがへ

小田原花の花の小田原おだはらはなをだはら

星月夜しよんがへ。ほしづきよ

思の津おもひつ

おもひの津に

船のよれかしふね

星のまぎれにほし

おして参らう。まゐ



君があげこし

君があげこし手枕の

たえて久しくなりにけり

何しにひまなくむつれけん

ながらへもせぬものゆゑに。

夜は

夜は誰と寝ん

常陸之介と寝ん

寝たる肌もよし。



柳ヤナギ

川添かわちひの柳やなぎ

風かぜふけば

うごくともれど根ねはつよし。

竹たけ葉は

靈山れいぜん御山みやまの五葉ごはの松まつ

竹葉たけはなりとぞ人ひとはいふ

われも見るみる竹葉たけはなりとも

折おりもてこんこん閨わがのかざしに。



衣ころも

さいばらに衣ころもは染そめめん

雨あめはふれどもぐ。

雨あめはふれどもうつろひがたし

ふかくそめてはく。

秋あきのうた

月つきのまへのしらべは

夜寒よさむをつぐる秋風あきかぜ

雲井くもいのかりがねは

琴柱ことしらべにおつるこゑぐ。



移り香

契りし宵の

たそかれしるべき

そらだきとめいるかたの

萩の戸をひらくや

袖のうり香。

月

世々の人のながめし

月はまことの形見ぞと

おもへばく

涙玉をつらぬく。

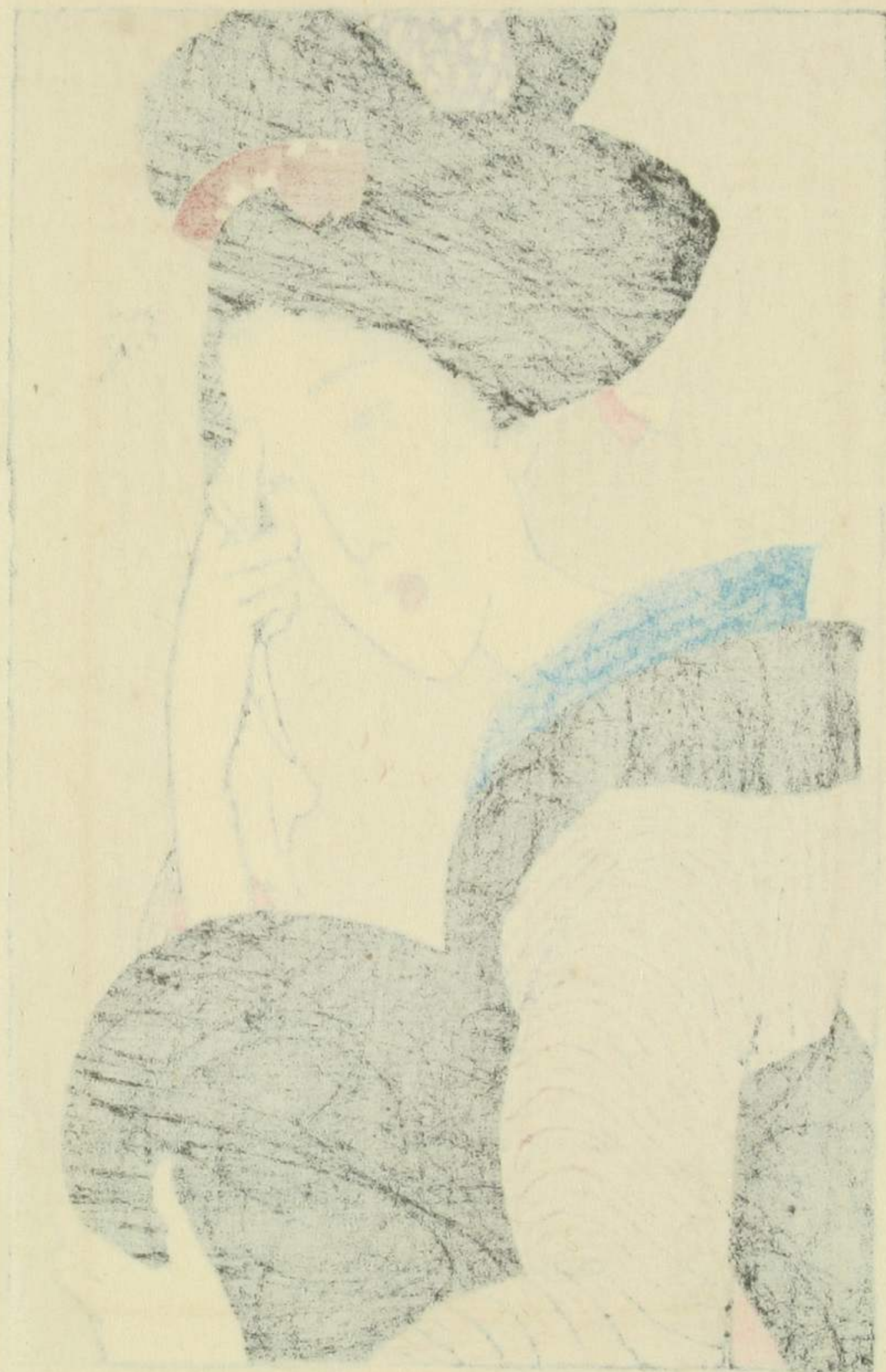




浅き夢

まどろめばおもかけの  
しげくとみじか夜に  
ほととぎすおとづれて  
はつねに夢ぞさめける。





わすれ草ぐさ

なか／＼にはじめより

なれずばものをおもはじ

忘れ草わすれぐさの名なにあれば

忍しのぶは人ひとのおもかけ。



うす衣ころも

數かずならぬ身みにはたど  
思おもひもなくてあれかし  
人ひとなみくくのうす衣ころも  
袖そでに涙なみだぞかなしき。

窓まど

たれ白雪しらゆきの  
うす雪ゆきのつもる手ては  
ふるともうれしや  
寢ね乗だ髪がみの  
寮れうの窓まど。



櫻さくら

かしは木のゑもんのまりを  
とんとけたれば  
まりはえだに  
とまりければ  
櫻さくらたはらりほろりと。

誰たぞや

たそや今宵こよひ小夜こよふけて  
柴しばの戸とをたゞくは  
小野上おのへおろしのおとづれか  
くるなのつぐるこゑぐか。



花傘はながさ

青柳あほやなぎをかたいとによりて

なくや鶯うぐいすうぐひすの

ぬふてふ傘かさは

櫻さくらが小枝こえだの花傘はながさ。

花はなのいろく

春はるによせし心こころも

いつしかに秋あきにうつらふ

黒木くろき赤木あかきのませのうちに

よしある花はなの色いろ々々。



うき身み

なかくくに人をばうらむまじや  
うらみじとにかくに  
かすならぬうき身みの  
はかどぞなしき。

雲井くもゐ

人目忍ぶの中なかなれば  
思おもひはむねに陸奥みちのくの  
千賀ちがの鹽竈しほがまな名なのみにて  
へだてし身みをぞこがるよ。



はかなき逢瀬

たまさかに逢ふとても

なほぬれまさる袂かな

あすの別れもかねてより

おもふ涙のさきだちて。

たよりに

いざさらば都人に

ゆきてかたらむ櫻花

このまのけしきことなるを

風よりさきに見せばなや。



あはぬ報さへ

おもかけのつくぐくと  
忘れもやらで思ひ寝の  
夢だに見えてあけぬれば  
あはでも鳥のねぞつらき。

いづはり

なかくにつらからば  
たゞひとすじにつらからで  
情のまじるいつはりと  
おもへばふかきうらみかな。



やどり木

さきの世の契りが

この世のうちの情か

むなしきあとゝ宇治の里

たへすこゝにやどり木。

屏風

七せきの屏風も

おどらばなどか越えざらん

られうの袂も

ひかばなどかきれざらむ。



舟ふね

苦草かぐさのや妹いもも乗のりたりや

われものりたりや舟ふねかたぶくな。

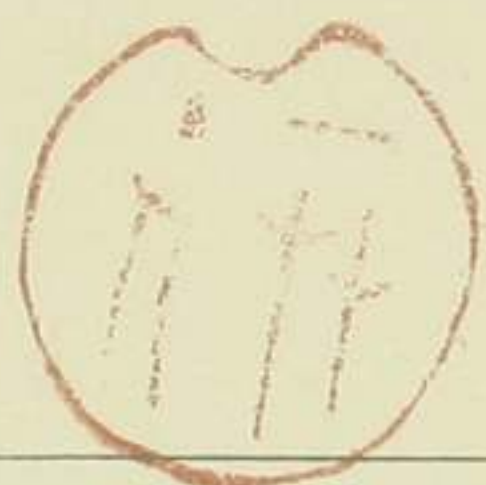
『露路のほそみち』をはり

大正八年三月十七日印刷  
大正八年三月二十日發行

露地の細道

壹圓五拾錢

印 檢 者 作 著



著 者	竹 久 夢 二
發 行 者	和 田 利 彦
印 者	東京市日本橋區通四丁目五番地
印 所	東京市京橋區築地二丁目三十番地
印 所	東京市京橋區築地二丁目三十番地
印 所	東京市京橋區築地二丁目三十番地

發 行 所

日本橋  
通四丁目

春 陽 堂

電話本局五十一番  
振替東京一六一七



